令和７年度

まごころ

令和８年３月２３日（月）
刈谷市立朝日中学校だより
Ｎｏ．５２１

卒業文集贈呈式

卒業式を目前にした３月２日（月）、卒業文集の贈呈式が行われました。３年生からいただいた文集の帯には、次のように書かれていました。

「『前田智徳の打ち方が好きだ。』と言わなければ、教頭先生と意気投合することもないでしょう。」
―4組　S.T―
「辛いときも自分のことを知ることから始めます。」
―2組　R.H―
「この三年間はこち亀の漫画全巻くらい内容が濃かった。」
―1組　R.K―
「あのとき、いつものように歌っていたら、最後までタイミングを掴むことはできなかったと思います。」
―5組　K.M―
「勉強という現実から逃げるな。青春も現実も今しかできない。」
―6組　U.H―
「僕の目から涙がこぼれた。まさかあの小さな痛みがこんな大怪我になるなんて思ってもいなかった。」
―3組　K.Y―
―――――――――――――― 本文より

式の終わりに、卒業文集委員・編集長の横山創士さんは、次のように語りました。

先生方からいただいた数々のサポートや、廊下で仲間がしてくれるの日々の挨拶から、「まごころ」とは小さなことの積み重ねによってできるのだと学びました。卒業式では、先生方に精一杯、感謝の気持ちを伝えられるように頑張ります。

３年間の思いが詰まった文集から、皆さんのたくさんのまごころをいただきました。ありがとうございます。

第38回卒業証書授与式

３月６日（金）、爽やかな春光の中、第38回卒業証書授与式が挙行されました。

校長先生は、234名の卒業生に卒業証書を授与した後、次の言葉を贈りました。

「あの日、つまずいた石は宝石だった」
人生、思いどおりにならないことが多く、失敗や挫折は当然で、そこで腐らず前を向けるかが大切です。前向きに生きていれば、つまずいた石はいつか宝石になります。
「まごころ」は、どんな社会になろうとも最強の武器です。これからもまごころをもち、まわりから愛される人になってください。

また、前校長の佐野教育長先生にもご臨席賜り、「世界中のどこからでも朝日を見ることができる。朝日に誓い、朝日に励まされ、くじけることなく夢の実現に向けて挑戦し、一歩一歩進んでください」という祝辞をいただきました。

最後に、卒業生を代表して、森田みとさんが答辞を読みました。

私たちは、それぞれが新たな道へと向かいます。自分が選択した道に責任をもち、支えてくれる仲間を大切にします。そして、この学校で培ってきた「まごころ」を胸に感謝の気持ちを忘れず、悔いのない人生を歩んでいきます。

皆さんの人生に幸多きことを願います。卒業、おめでとうございます。

2年生がバトンを受け取る

卒業式後の３月９日（月）、最上級生になった２年生に向けて、３年生の先生方から、お礼と激励の言葉がありました。

バトン（花束）を受け取る2年生

２年生を代表して、猪熊智さんは、次のように述べました。

２年生のためにお集まりくださり、ありがとうございます。卒業式では、３年生の力強い返事や心のこもった歌など、堂々とした姿から、義務教育９年間の大きさを感じました。これから２年生は、先輩のように頼れる存在になれるよう、先輩を見習い、追いつき超えられるように頑張ります。

２年生の皆さん、伝統を受け継ぎ、「上昇志向」でよりよい学校生活を創ってくれることを期待しています。

合同社会科授業

東日本大震災から15年経った福島のことが気になった生徒は、福島の現状を調べました。そして、探究課題「福島の復興は進んでいるのか」について、農業や漁業、生活インフラなど、さまざまな視点から追究しました。

３月３日（火）、３年生は最後の教科の授業として、学年全体で話し合いました。この授業には、福島大学の先生と学生の方もオンラインで参加してくださりました。

福島の方に質問する高野さん

髙木麻由さんは、次のように振り返りました。

同じ双葉郡内でも、場所によって様子が違う。特に双葉町は、帰還困難区域が多く、インフラ整備が進んでいない。しかし、広野町のように町おこしイベントをしたり、バナナやみかんなどの新名物をつくったりして、人口が回復しているところもある。元に戻すのではなく、新たに町を創るという発想がよいと思った。

シェーファー選手　ありがとうございます

シーホース三河所属のシェーファーアヴィ幸樹選手より、市内６中学校へバスケットボールを寄贈していただきました。

これは、シェーファー選手が昨シーズンに記録したリバウンド数にちなんだ数のバスケットボールを贈呈する企画であり、日頃より支えていただいている地域の皆様へ、感謝の意を込めた取り組みだそうです。ありがとうございます。大切に使わせていただきます。